

## グローバル社会に生きる私達の価値観

(原文)

浄慶 栞 (15 歳)

滋賀県

立命館守山高等学校

「はじめまして。よろしくお願ひいたします。」

クラスの生徒全員が見つめる中、黒板の前で最初の挨拶をする。その瞬間が私にとっていつも「さようなら」へのカウントダウンの始まりだ。父の仕事の都合で毎年のように転校を繰り返していた幼少期。私は様々な地域に暮らし、いろいろな人と関わり、たくさんの経験をした。

何度も繰り返す転校の中、様々な同級生と出会った。生活に困窮している子、見えない障害を持つ子、ヤングケアラー、虐待が疑われる子。大人の言う「事情のある子ども」だ。彼らは皆「かわいそう」と言われることを非常に嫌い、誰に対しても笑顔で見えない壁を作っていた。

私自身「事情のある子ども」と言われていた。理由はいくつかある。毎年のように転校を繰り返し常に「よそ者」であること、重度食物アレルギーで食事制限があり皆と同じ学校給食が食べられないこと、常にアドレナリン自己注射薬を携帯しアレルギーのショック症状が起こると自らの手で注射を打つ必要があること。これらは全て私にとって当たり前の日常だ。

多くの大人が、事情ある子供に対し、「かわいそう。」と優しく言葉を掛ける。しかし反面、その言葉の残酷さと影響力についても少しだけ考えてみて欲しい。大人のその発言により、周りの子供たちは相手を「かわいそうな子」と認知する。そこから無自覚な差別の芽がうまれる。言われた当人は、いたたまれない気持ちを隠し平気なふりをして心を閉ざす。幼い子供にとって、身近な大人の持つ価値観やその発言の影響力は想像以上に大きい。

大人や周りの人の価値観が全て正しいと思っていた。転校のたび周りに合わせ自分の気持ちを抑えた。他人からの心無い言葉に俯き、唇を噛む友達に気付かないふりをしたこともある。しかし繰り返す転校の中で、住む場所や人によって物事の捉え方や価値基準が全く異なることに気がついた。

人は皆、外からは見えない様々な事情や思いを抱いて生きている。自分の価値観からの判断のみによる一方的な思い込みや中途半端な同情、興味本位な行動は相手を深く傷つける。また、たくさんの出会いの中、物事には全て奥行きがあることを知った。自分の言葉と行動、その影響力に自覚と責任を持たなくてはならないことも学んだ。

「価値観とは自分の属する社会が作り出すもの。」

授業中、先生が口にしたその言葉が心に強く残った。確かに人は自分の属する社会から強い影響を受け、その中で経験から考えたり比較したり物事の善悪を判断する。幼い頃は家庭という社会、そして学校、地域、自分の国、そして世界へと属する社会は大きく広く変化していく。当然、違う社会に属する相手に出会うたびお互いの価値観との違いが生じる。良い刺激を受け視野が広がることもあれば、差別や争い、衝突が起きることもある。その最たるものが世界中で繰り返されている戦争だ。力で奪い取り制圧するのか、共存を模索するのか。歴史背景もおかれた環境も異なる国同士の、その価値観や信じる正義の違いによる大きな溝を私たちはこれからなんとしても埋めていかなくてはならない。

高校生になり、オンラインなどで外国の人と接する機会が増えた。国際社会の一員として世界が身近になってきたと感じる。この先様々な新しい価値観に出会い、感銘を受けることも逆に納得できずぶつかることもあるだろう。お互いの価値観を認め合い柔軟に変化を受け入れる、視野を広げ正しく判断し自ら行動する。これらを常に忘れずにいたい。

人の価値観は社会の中で形成される。そしてその社会は一人ひとりの人間から構成されている。私たちはいま、社会から影響を受けるだけだった立場から社会に影響を与える側へと変化している。自覚しなくてはならない。これからの社会の価値観をつくり出すのは他でもない私たち自身である、と。私たち一人ひとりのその意識と行動が、差別や争いのない本当のグローバルな社会を作り出す第一歩となるだろう。